

一第38編一ブルヴァールとアパートマン^{*1}^{*2}

パリの街を歩いていると、特徴のあるブルヴァールやアヴェニューが印象的だ。市壁に囲まれていた中世のパリの中心部は、密集した建物でびっしりと埋め尽くされていた。衛生状態も最悪で、糞尿もアパートマンの窓から通りに平気で投げ捨てられていた。マントをまとった紳士が建物の壁側に連れの女性を寄せ汚物から守ったという話など、今では到底考えられないことだ。セーヌ川もそれらの汚物のはけ口、つまり下水の川だった。こんなパリの劣悪な環境に耐えかねたルイ14世^{*3}が、郊外のベルサイユに離宮を建てた(1682年)という逸話はよく知られた話。その宮殿にさえ内部に常設のトイレはなかった。有名なパリの下水道網にしてもその後の19世紀半ばになって整備されたものだ。



写真38-1 大通りとパリエンヌ

そのナポレオン3世^{*4}の第二帝政期(1852~1870)に、彼を支えた都市設計家ジョルジュ・オスマン^{*5}(当時のセーヌ県知事)が登場してパリは劇的に変化した。短期間にいくつもの大通りや広場が作られ、美化、浄化、衛生化を目的に、現在の都市構造と都市景観の骨格が作られた。パリの代名詞のようなプラタナスの街路樹も、周到な計画と先端の植栽技術で素早く通り沿いに

植えられたのであった。大通りの大きさと形状は、中央を行進する皇帝に石が届かない幅や、市街戦で鉄砲の玉が届きやすく敵が隠れにくい直線が選ばれた。

そんなきさ臭い歴史を刻みながらも、今では立ち並ぶアパートマンや公共建築物や広場等が実に豊かな都市景観として醸成され、何度行っても見飽きることはない。近年噂の現代建築群も平然と飲み込み、時代が幾重にも折り重なった劇場のようなこのまちの風情こそ、人を魅了して止まないパリの資産なのだ。一見整然としたこの景観の中に実に多様な多彩な建物の表情があり、行き交う幾多の人々がシナリオのない演劇を演じる。

伝統的なアパートマンの多くは一階がお店で、二階から上が住宅。それも上階ほど階高が低くなり、屋根裏部屋になると鳥の足音さえ聞こえる狭い空間が連なる。そこにかつてはお針子さんたちが暮らしていた。つまり、一つの建物の中に富裕層から底辺の労働者までが垂直に棲み分けていたのである。仏政府給費研修生時代の私の住まいは、エレベーターのない8階の屋根裏だった。パリの屋根を見渡せるベントハウスは、今でこそ大人気で見つけるのも大変だが、当時はまだそうした冷徹な階級社会の残滓が集合住宅の垂直構造の中に刻み込まれていた。それでも、パリのハードボイルドで奥深い大人の都市の生活文化に魅せられていた。

ブルヴァールとアパートマン、このパリを象徴するたった2つの都市の要素からまちの奥深い歴史と社会の姿が垣間見えるのである。



写真38-2 大通り沿いのアパートマン

*1
Boulevard : Avenue
とともに大通りの呼称

*2
Apartment (仏) : 中
高層の集合住宅

*3
Louis XIV (1638
~1715) フルボン
朝第3代フランス国王

*4
Napoleon III
(Louis-Napoléon :
1808~1870)

*5
Georges-Eugène
Haussmann
(1809~1891)